十四

みをつくし

国立国会図書館　　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

三月十三日ニ次テ三ノ古院ノ夢ニ見給ヒシナリ

さやうにみし夢の後は院のみかとの御ことを心にかけきこえ給ていかてかのしつみ給らんつみすくひ奉る事をせんとおほしなけきけるをかくかへり給てはその御いそきし給神無月に御八講し給世の人のなひきつかうまつる事むかしのやうなり大后御なやみおもくおはしますうちにもつゐにこの人をえけたすなりぬることと心やみおほしけれとみかとは院の御ゆいこんをおもひきこえ給ものゝむくひありぬへくおほしけるをなをしたて給て御心ちすゝしくなんおほしける時々おこりなやませ給し御めもさはやき給ぬ

第十四

共五十四巻

渡利邑

松浦氏

あれどはかばかしく世のくあらましうむかしのさま
事とのみ思ひしうちにもとおぼしけれど書まいし
かりて源氏の君を気給ふ事のことなしとゐて
てけしの給ふ事はこのやうなれどおほやけ
たのもし人もあいなくうしろこともふかうこび
まうしけるおぼえぬなれんの事むつかしひちうく成ぬる
まゝ宮のこのむほどまふ世思ひなけれど入給
あるいとうらみれはおぼさるゝをおとこ君大宮
もたのもしけなくのみなりあひ給へるまゝの世
かぶまをくなんもちまさりまさん事とくそうか
てうまされさうおくとものきん給ふ

人の心を思ほし給ふ事をみづからのむかしの
なかれなるひまさへ病ことゝ見えずん象おかしけをを
おもひさらにさる人又おはしありてみ給ふとてとどろりかな
らぬひざしきこしもなきぞらそさんと思ふかたゐて
そむくらしけまとてうらなれ給ふ君のうへいかで
かうくもひきこほるちうつるの御あはきやううまく
後こそおぼえぬるとやかくの侍る事にて侍まらう女
しも内侍のかみをこそなしさしみことたふも給つまでまか
くら柳しうもうるうるの契のふかき人のさかまさる命
みいくら給てんと思ふきくら柳しやうさらまあれど
さく人すくなみ給へりしなどおはす心をと絃さ

色の給ますることいやをろのしりもなかりけるをた
ぼし給ふ御くちなしとなさめりしうちようつくう
きりなれ給ひしのとし月よそふ程にまかくなか
さうをものふまかでぬれ人なれど御しも思給へるさ
つらしけれ見むる人なきその心ひかれぬるまでまゝ
なにとてわが心にまかくいきをかけたまものせてさ
せさえこ御くひさいそくよりなどをおもてさしことい
ふびん人の御むすめへなとおもしけるよいやう
見給かなしやうくろ年の二月に春宮の御元服せ
ことのも十一になり給へとやゝかりけりいかてふれ
やきりうちよりうすくこゝ源氏の大納言の御むすめい

やさ給ふよしつしさらん極ふふみて給ひやますとも
こゝのてひとまあひめくこゝとをんめてうれ物よ世の事
まど母后八ついみけうこくりいろ見ことふあひ
なく給ひもとつし給ひてもめでたしとみかど
給ふと世中おつりましまし給へて見とましなとなりし
きこえたまふしを給ひまいらせて月の女よ日悦びくふゆつり
のこと儀なればおほきさきおほしめしてまうしひか
見さ海なけのうち御めのふたらしきまうしかべきいと
もと思ふなしとかやすしなくものありけり給ひてう薬書
殿の見ことぬ給ひて世中よりたらつらくいひ見えくいやし
めし給ひ事どもおほかりつる源氏大納言の御大臣よ成

朱ノ位ヲ冷ニユヅリ其後ハ悪右（孝行ニ王トナクサメ給ヒ）
朱ノ子今上ノ
東宮趣冷

ぬかずさだまりてくつろぐ所もなかりければくはゝり給ふなりけりやがて世のまつりごとをし給ふべきなれどさやうのことしげき職にはたへずなむとてちしのおとゞ摂政し給ふべきよしゆづりきこえ給ふ病（致仕ノ間）によりて位をかへしたてまつりしをいよいよ老のつもりそひてさかしき事侍らじとうけひき申給はず人（漢高祖）のくにもことうつり世中さだまらぬおりはふかき山に跡をたえたる人だにもおさまれる世にはしらがもはぢずいでつかへけるをこそまことのひじりにはしけれやまひにしづみてかへし申給ける位を世中かはりて

（又）またあらため給はんにさらにとがあるまじうおほやけわたくしさだめらる（致仕ノ人ノ摂政スル例也）さるためしもありければすまひはて給はで太政大臣になり給ふ御年も六十三にぞなり給ふ世中すさまじきによりかつはこもりゐ給ひしをとりかへしはなやぎ給へば御子どもなどしづむやうにものし給へるをみなうかび給ふとりわきて宰相中将権中納言になり給ふかの四の君の御はらのひめ君十二になり給ふをうちにまいらせんとかしづき給ふかの高砂うたひし君もかうぶりせさせていと思ふさまなり腹々に御子どもいとあまたつぎつぎにおひ出つゝにぎはゝしげなるを源氏

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

のおとゞはうらやみ給ふ大殿ばらのわか君人より
ことにうつくしうてうち春宮の殿上し給ふこひめ君
のうせ給ひしなげきを宮大殿又さらにあら
ためておぼしなげくされどおはせぬなごりもたゞ
このおとゞの御ひかりによろづもてなされて
としごろおぼししづみつるなごりなきまでさかへ
給ふ猶むかしに御心ばへかはらずをりふしごとに
わたり給ひなどしつゝわか君の御めのとたちさ
らぬ人々も年ごろのほどまかでちらざりけるも
みなさるべきことにふれつゝよすがつけんことを
とおぼしをき給ふにさいはひ人おほく成ぬべし

二条院にもおなじごと待聞えける人を哀なる
物におぼしてとしごろのむねあくばかりとおぼせば
中将中務やうの人々にはほど/\につけつゝ
情をみえ給ふに御いとまなくてほかありきもし給
はず二条院のひんがしなる宮院の御せうぶんな
りしを二なくあらためつくらせ給ふ花ちる里など
やうの心ぐるしき人々すませんなどおぼしあて
てつくろはせ給ふまことやかのあかしの心ぐるし
げなりしことはいかにとおぼしわするゝ時なけれ
どおほやけわたくしいそがしきまぎれにえおぼすまゝに
もとぶらひ給はざりけるを三月のついたちの程

このころや（誕生シ）とおぼしやるに人しれずあはれにて御つ
かひありけりとく（疾帰来）かへりまいりて十六日になん女に
てたひらか（平産）にものし給とつげきこゆめづらしきさまにて
さへあなるをおぼすにをろかならずなどて
京にむかへてかゝる事もせさせ（産シ）ざりけん
くちをしうおぼさるすくえう（宿曜ニ宿曜師勘之）に御子三人みかど（冷ノ御）
きさきかならずならびて生れ給べしなかのおとり（中劣ノ）（夕霧ヲ中ニテ太政大臣 又太政大臣）
は太政大臣にてくらゐをきはむべしとかん
がへ申たりしことさしてかなふ（叶）なめりおほかた（源ノ御）
うへなき位にのぼり世をまつりごち給べきこと
さばかりかしこかりしあまたの人（さうイ）どものきこえ

あつめたるを年ごろは世のわづらはしさにみな
おぼしけちつるを當帝（今上ノ）（冷ノ御位）のかく位にかなひ給ぬ
る事を思ひのごとうれしとおぼす身づから（源ノ）も
もてはなれ給へるすぢ（天子ノ御位ハ有ニニキトヤ）はさらにあるまじき事と
おぼすあまたのみこたち（キリツボノ御子）の中にすぐれてらうた
きものにおぼしたりしかどたゞ人におぼしおき（源ト）
てける御心を思ふにすくせとをかりけり内（冷）のかく
ておはしますをあらはに人のしる事ならねど
さう人のことむなしからずと御心のうちにおぼし
けり今ゆくすゑのあらましごとをおぼすに住吉の
神のしるべまことにかの人（明石上）もよになべてならぬ

ぬすくせにてひか〱しきおや（入道）もをよひなき心
をつかふにやありけむさるにてはかしこきすち
にもなるへき人のあやしきせかいにてむまれた
らむはいとおしうかたしけなくもあるへきかな
このほとすくしてむかへてむと思して東の院
いそきつくらすへきよしもよほしおほせ給ふさる
所にはか〱しき人しもありかたからむをおほして
故院にさふらひしせんしのむすめ宮内きやうの
さいしやうにてなくなりにし人の子なりしを母なともうせて
かすかなる世にへけるかはかなきさまにて子
うみたりときこしめしつけたるをしるたよりあり
てことのついてにまねひきこえける人めしてさ
るへきさまにのたまひちきる（ヤクソク）またわかく何心も
なき人にてあけくれ人しれぬあはらやになかむる心
ほそさなれはふかうも思ひたとらすこの御あたり
のことをひとへにめてたう思ひきこえてまいる
へきよし申させたりいとあはれにかつはおほして
いたしたて給ふもののついてにいみしうしのひまき
れておはしましたりさはきこえなからいかにせ
ましと思ひ（乳ノ）みたれけるをいとかたしけなきに
よろつ思ひなくさめてたゝのたまはせんまゝにと
きこゆよろしき日（吉日）なりけれはいそかしたてゝあや

しうとむやまなきえやりなれど思ふさまことなり（源ノサ□ラヘ）
ことふてすんみづからもおぼししねすなぬまゝむを（源）（次ニ何云）
われさりしあしと思ひようへく忘れわれ（甚動ス）
し給へなところのうり庭り思ひしらひ給ふ（源ノメノトニカタリ）
うちの宮ばかのへぬくきしうぐしみ給おりもあつらし（桐）（源ノ乳母ヲ）
故ひぐうりし人まだ家のさまもいとひしらびか
まゝどひく所をのふおもきなる所のまこちなと（父ノ家ナルヘシ）
うとましげよいくもしつれとみな人のさま
わりやかにおかしげなるは心得しられそらつく
さしかれゆくしとあまりつへきみちこそすれいふ（下ルシ引也トメタキト）
との給ひつくはせまくとげにも力をうちもはげのすさう

なればう気由をなく内におましやみなまう（刑）（源シ）
つ目てふる色さくぬ中となしも目と方のき（源ノ折ツケノ別モオシキトシ）
を押しきをのまそめりけらしひやしおましや
の給へどしおらひて
うら浅のわりのきもと押し寄りことなく思ひけれ（メノト）（モノナルテシ）（カコツケセ）（ねイ）
こくまをさひやきをめおれくや宮の番秋にといひしと（ホメタル心ナルヘシ）
おぼす車すくなくぞ京のおどはおもすれけるいと
たくし人さしうへく由ありしそましをぐらの
さあめて浅のふん法げしさるくま物なと添せ給（心ヲ入トス）（延喜日社东清録嘤其例也）
まで押しやらぬくますしめれとうきまうくう
こまやうなる法いてさ思とのかぞあさうしずへき

此思ひつゝ侍けとらんありくさま思ひ給へるもおく
（源ノ）忍まれ侍りしかばく之為よむろしうもさしは
ことに此なむまつろも波のしねよしそは浮之まを
（此ムスメヲ）ところのふかくすゑ思ひまはしとゞめ（レウジニスベシ、ジキヨシ此作テ此文モ可有）をあかし
（源）いつしか神のしるしをとめみうず世にたてつくすを（イツシカモトハ源ノイツシカ毛ロ氏ニトナルヘシ）（しるしハ明石ノ上也）
（侍リイ）てん岩のおひさき侍の国まへしや母まくされより
あれ多る馬まくいうふつ京へ入道まちとうよろ（明石へ）
うひしこまつ中のろゝしうぞまもりそなるま（源ノ方ニ）
むさこてとおぼえすゞてありなま源むをへを思ふ
まうよくいうまし京おぼろ京て思ふちこの
いとゆかしきまでうつくしうおぼえん事さくひ

すげなうしあはむ魚むまのしはべ気變らんとおぼ（源ノカシヅケトラ侍ハ言ナトセ）
むすめをたてまつらんとみさくまはべるまゝおや（大ノトノ）
きみちまに出たちて京のむちちはべるかげきをいふあ（大ノ君ダ元タ）
まそりいやうつくしうらうらおぼしてありう
いまのこゝろの君もたじろゝその秋のゝ思ひたつ（明石上）
てうぞよけうむちよりまいりさんとまもおぼしまうし
侍るとは源の入てのすゝしの思ひなくありける（源ノ御志氏ニ）
おくりそうしらゝりけくはつひゝよなくむ
さしをさくすゝくさりけんといまきゞしり（朱雀ノ帝）（御京）
まう思ふ由しきとすゝしてはしきて
（明石上）ひとりとしてなりかゝる袖のかへしけれはまれあかしも

ろこのかめ゛ゝしうまつや〻しあゆかやしぬまて゛
涙（源ノ）むまのくつゝゆうしゝれわさ゛ま女めつゝやこしぬ
あゝもしてをおさくえこし給まそとまくかうせ（りなよそくりけそれ人かと）
行ことも（こ）そとおほしてさしも給すれあやしう（源ノ詞　世ノナラヒサコソアレトセ）
ねち゛あゝるまさこならやさもおほしせすんと思ふあ（云詠毛十キ）
よろつまてひりとなくて思ひのおふ口惜しくすれ
女まくゆくあな゛れい゛やよそりのしけき露もゝ
て゛もありぬへ゛くまし　なれ゛とさし思ひとゝまる゛
其わさ゛なれ゛らひ゛ゝまやうてつれなきをまんよく給
なちときこえ給へ゛ともれ゛ありてうちあうこそあやし
うつせふりやなるすち゛の給つくる狂かたらふ

我なけ゛のかうしまけまてのまくみハいかなからよ
へ゛き人すりとえ゛給くも゛いとよくうちゑこそしそよ（源語　ナシハト云詞也）
うつ゛なけもしまのあくれん思ふひ゛すそみし給よや（源ノ御所）
人のむよそとゆのなくおもひや゛きこ゛としく物ゝて（不意ナルト可心得）
なとしめよ思ひ゛そのゝしもてもくく経ゝ゛ゝ
源もとし゛しろあうもこ思しやも思ひしまゐしにぬ
からとも゛おもりくの源文のうよひなとおもし゛ゐう゛ら
まこゝろは゛のまゝすきひまにそあまうと思ひまく
連源ちの人をとうまて思ひやつまさやくふをあ給（源詞）
思ふ多うの御ち゛そ゛まきさまふきこえ心え゛ひのし給
のよへ゛はれ゛とのぬゆして人つゝのおしりこし（源詞ワスレノ）

国立国会図書館　　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号　　ガラス使用

も所（明石ナレハ也）からにやめつらしうおほえしかしなと語
聞え給ふあはれなりし（明石ノ巻ニ塩ヤクケブリノ――文 此――ことのえうとをくり給へり）夕へのけふりいひし事なと
まほならねとそのよのかたちほのみしことのね
の（明石ノ引給琴）なまめきたりしもすへて御心とまれるさまに
の給ひいつるにも（紫上ハ無類ニ給ヒシ心ニテノカナシカリシト）我は又なくこそかなしと思ひなけ
きしかすさひにても心をわけ給ひけんよとたゝ
ならす思ひつゝけられて（人ハ我カタキト）我は我とうちそむ
きなかめてあはれなりし世のありさまかなとひとり
ことのやうにうちなけきて
（紫）思ふとちなひくかたにはあらすとも我そけふ
りにさきたちなまし（源詞 言ヲトガメテノ詞也）なにとかこゝろうや

（命たに心にかなふものならは何か別れのかなしからまし）

（源）誰によりよをうみ山にゆきめくりたえぬなみたに
うきしつむ身そいてやいかてかみえたてまつらん
命（命ヲシラヌト也）こそかなひかたかへい物なめれはかなき事
にて人に心おかれしと思ふもたゝひとつゆへそ
やとて（シヤウ）さうの御琴ひきよせてかきあはせすさひ
給てそゝのかし（源ノ出給ツ）聞え給へとかの（紫上 明石ヲ上手ト聞テナルヘシ）すくれたりけん
もねたきにやてもふれ給はすいとおほとかに
うつくしうたをやき給へる物からさすかにしうね
き所つきて物えんし給へるかなか〳〵あい
きやうつきなし給ふをおかしうみ所ありと（源ノ）おほす五
月五日に（ソチ イツカ）（ぞイ）（五十日ノ）いかにあたるらんと人しれすかそへ給ひて

ゆかしうあはれにおほしやる何事もいかにか（京ニテナラハイカニカヒアルサマニセマシト）
ひあるさまにもてなしうれしからましくちをし
のわさやさる所にしも心くるしきさまにていてく
るよとおほす男君ならましかはかうしも御（女君出生）
心にかけ給ましきをかたしけなういとほしう
御すくせもこの御ことにつけてそかたほなりける（三ニ 源ノ宿世カ姫ノ出生ノタメ）
とおほさるゝ御使いたしたて給ふかならすその日
たかへすまかりつけとのたまへは五日にいきつ（イツカ）
きぬおほしやることもありかたうめてたきさま
にてまめまめしき御とふらひもあり（源 海邊松ハ不変ノ枕詞）
うみ松やときそともなきかけにゐてなにのあ（五月五日ナレハアヤメトヨメリ）
やめもいかにわくらん心のあくかるゝまて（五十日ヲモタセテヤ）
なんなほかくてはえすくすましきを思ひ立給
ねさりともうしろめたき事はよもとかい給へり入
道れいのよろこひなきしてゐたりかゝるおりは
いけるかひもつくりいてたることはりなりと見ゆこ
ゝにもよろつ所せきまて思ひまうけたりけれと此
御使なくはやみのよにてこそくれぬへかり
けれめのともこの女君のあはれに思ふやうなるを
かたらひ人にて世のなくさめにしけりをさをさ
おとらぬ人もるいにふれてむかへとりてあらすれと
こよなくおとろへたる宮つかへ人なとのいはほのなか

さかゆるおほちとゝなとまてなしつゝまつりこちさやこ
よをうこめき里ありまうけかなかりけるの御絶家に
としてたゝ人の帰らうくまよふのしけのま
須磨にはいとゝ心つくしのあきかせにまつせての式
またなくうつしけくせしけよりくおほしいけつる
の秋こそとく浪よりあとにやくけくやうく思ひ
なりけり御文なりとくきよこてしのうちにうつれ
うらうらのあかきにそのなくせうくせしあかけき
うきとの波かゝりてまけきと思ひつゝけら
まきぬれのやまひうつゝなとこゝのふとらう
いまはのくるしきをなくふらをなく行くかな

給へしほとを
四方のすゝらぬみなゝくまてなくかうそらんを
いかにとくみ人ぞなれ弟は思ひくもをかしまく
うかりさまをくおもひの中にくはかにゝかゝる
僧の顔もきらなくすんまいふかしろやうく心深く
とくまさこもかなとまゐやうつき見こえしうらうら
とし月経給ひくるとなけのやうのこひとまこゝち給はせ
夫しなめふみてとまさく海よりもほくる丹おやせ
思ひやりつくひとつこゝろなけのあはれをかことうち
くまてとはまかり給ふてつゝうつゝのおもかやや成
のさ海なとうち思ひあはれなるくまうしくうのまよすれ

三熊野の
浦よりをち
こく舟の我をは
よそにへたて
けるかな

のこゑひとつまちし［ヨソノコソ思トガメラルヽト也］よりこそ思をくいぬるか

ことさら見しらぬ（源ノ使ヲテ）給ひくさ（文ノ）しげくみちのことはりをしらせけり

[illegible]（手）なとついてゆへ源氏さやしこしなれ人を

[illegible]まなりとうく（カ）まつおもひいで（五節ノ）すくなき（宗ノカムシ）

源氏もやり給ひあやにくに花ちるさとをとうまきまて給ひける

らうしやもとしけきまちやまと、ことたけく［illegible］

源氏かたおほしもくつる［花散里カタチヨカラヌ故ニ］みこうへくもめくして源氏の

おとろくことなれどおもひあつき給ふめり

みなほつれくなりつろむもやあはれくし［illegible］

かなくるに［源ノ花ちるへ］給へるまよそあはれ

もの思ふはまくらの源氏は御ありしやまとうつり給ふ

それのまほくらべい給ふなれどもいりめしうむ

いすくなくさう／＼しくてなかなかむかし［illegible］

あなたりとし給ふまゝよくあまたさうさいけまてて

りま女御の君（レイケイデン）御物語やうしのそてましの源氏どもふ

夜更ゆくにしたがひて給へるほどに月さし入

ていとゞこだかき源つまりひ源氏もきこえみて給ひ

やはらかしまじりけるもやうしちうらなけのおける

さ夜なかし［illegible］給ひやうもとりの源あきてひいそめ

やうしくるなのいゑちらうるなにを

（花ちる）兵部たふおとろのゑこいつかしくそあふまゝる宿

（源三此ス）ふ月をつましやなりうしりいゆりちゝへろう

崇上ハワロゾケアリナトヨミぬべり
ゆるくぶもぞてく見せりがふゝれしもなけれく
為をとくろしけまゝ吐て（源ノ）打かを
（源）とうなくくとて火鉢におとろうしうこの空
なう月もゝきつまうしろめくと幸取ことてう
やし源へとあくさくししさすらなとうつくし為
（三）源じあんまをうゝすとしじろ揺すくしやめし源へ
浦もさしにとろうぶおださ（き）れさるこそわまをすくう
見んうやたの見んきさこえのしなりの事もの源にいでく
みそてたくひあしとゆうしうこのを思しんこ
（田京ニテ四ノ治ヲ見エタ辻　同上）
きんう見力のしをおもしそうしさふこうもの（花ノ三）
源へ見とおもひらゝうりらうたをなりけるのうち

源氏ノ眺ク云
ゆほう源のま
すじへきた
けさの
あくらくて
らん空に
あかめて

あの浦ことれうふゆうゝん源氏をびゝうくゝらひな
ぐさめやし源へやうの源るでつとうの又きちをと
れぶしわすれずえとをしがをひまの由源へきま
（大弐ノ所ハ向源氏ニ）
とはしと思う見ことしさくき見き源氏と女物こむ
（大臣ヤ名ニモアワセシテン思ヘリ）
きまるをおやえよろ源ま思ひける事とあまつと
あふへんことをおもひたゝしよき心庭をえ敷つくり
しても宮の庭りの人つどへてりし思ふ揺まりし源見
あ見人もいとく物し源のぶさうの人のうつことしを
（五節ナドノヤウナル人ヲ集テノ姉君中宮ニモト思召揺ニモトモ）
（東）ぼと按察院のほくつまざ海なりつくつゝ所おもく命婦い
（立リヤウ）（同）まうよしあ見ずよりけとをゝわてめつくしり
めしに源内ゆののんのむそすくと早せひそふらえ

かし給ひあまたすなからうる宮を心ぐるしくおぼす
まじかるべきこらひてはしのやうにもおほし
らん事し給ふをやめしおぼしなりてうつし帯をも
朱雀院ハみかどやうやうおぼしなりてげにはゞを
ておりゐさせ給ひなどこえみまかておはします
をかの宮むつれなるのじきさひ行幸など春宮（今上）の
后母女御の子うまれてたてゝ坊にゐ給ひぬ
くゐんの君のたゞほどまさりきたまふをと
りくひさたりゐてたまぐさいもいまでたまはれ
出く宮（去文）まゐるひさしさうのぶ（源）ぐの御殿の方
ハ着人のきげいさかりすてはゞかりにまゐらせ

せじちうとなりの御むすめ行事もやむごとのしうとて
ひく宮（今上）ともうしろみをまゐらす入道后（キサイ）の宮御位
ゐを又かへ給ふべきならねば太上天皇になずら
へてみふ（封戸）給はらせ給ふ院司（院司）どもなりてさま
ことにいつくし御おこなひ（七イ）くどくの事をつねの営
みにておはしましとしごろ世にはゞかりて出入もかた（ミけきイ）
くみたてまつり給はぬなげきをいぶせく（入道ノ宮ハ源入道ノ首ハカクサセ）
おぼしけるにおぼすさまにてまゐりまか（云ヤシ）
でたまふもいとめでたければ大后（コキデン）ハうき物ハ世
なりけりとおぼしなげく（源ノ思ボく宮ニ見セトヘ）大臣（源）はことにふれていと
はづかしげにつかまつり心よせきこえ給ふを

なかくひとをしきならひを世人も面白うひやさし
ける兵部卿のみことは御むすめたちつくし
ありきくとなのききこしそのきさきもさうりを
のしましとおはしますを（源）そうえ入物なれは又ていまし
のやまとも出つひやし給ひすなくくの世にまちあ
まいくみそまれ給ひむすれとも（兵部卿）しれ給へおもてまへにかし
なきけなれつつてもうちませぬと入花の宴をいて
（兵部卿）朝かほはなれこともみさきらのくさ萱
のこともなりのそとつきて（ちしの大臣）すまたのとくあのれ
（源）とくの給ひまくなり（太中納言）権中納言の御ありける年
の八月の（入内　巻八）まつりを給ひおちちおとく（居立）ぬくちてさし乃

なにかしのあまりし兵部卿の宮の中の君（式部卿ノ妹）もさやう（巻八下）
まいるしてもつまぬなれは又おもふをたへ人よりまさ
藤壺人と（紫上）（源氏）もすおのをなけれはけるゆへし（兵ノムスメノ十四歳）給ひけれ（源氏八才ノ秋）
とすらしろの秋むこともしかまくく給ふ秋（源氏ハ元ノ秋）とせも
たし給へはれいゆのめしき給へりうち志ますく帯もち（初寸）
まく上達部殿上人つまともくやうのうさうり給ふ
おほとちもののありつ人（明石上）年ことのれゐのこと（例）
まくつうりまつあつ（十年）とこと（明石上懐妊ニヘ）としさしめしゆへ（年）
てあとこちまけるにいまいつたてまつりさいねくをもひ
うらにへの舟にて思ひあらまはし（明石上舟）まふつくる程
入道ハめくきりてまゐりて行くのまつひなにはか

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

みちていつくしき神宝をもてつゞけたりが
く人十列なとさうぞくをとゝのへかたちを
えらびたりたがまうで給へるぞととふめれば内
大臣殿の御願はたしにまうで給ふをしらぬ人もあり
けりとてはかなきほどのげすだに心ちよげにうち
わらふげにあさましう月日もこそあれなかなかこの
御ありさまをはるかに見るも身のほどくちをしう
おぼゆさすがにかけはなれたてまつらぬすくせながら
かくくちをしききはの物だに物思ひな
げにてつかうまつるを色ふしに思ひたるに
なにのつみふかき身にて心にかけておぼつか
なう思ひきこえつゝかゝりける御ひゞきをもしらでた
ちいでつらんなど思ひつゞくるにいとかなしうて
人しれずしほたれけり松原のふかみどりなる中
に花紅葉をこきちらしたると見ゆるうへのきぬ
のこきうすきかずしらず六位の中にも蔵人は
あを色しるく見えてかのかものみづがきうらみし右
近のぞうもゆげひになりてことことしげなるずい
じん具したる蔵人なりよしきよもおなじすけに
て人よりことに物思ひなきけしきにておどろおどろ
しき赤衣すがたいときよげなりすべて見し
人々ひきかへはなやかになにごと思ふらんと見えて

打ちりたるにわかやかなる上達部殿上人の我も
我もと思ひいとみて馬車なとまてかさりをとゝのへ
みかきたまへるはいみしき見物にゐ中人も思へり御
車をはるかにみやれは中〳〵心やましくて恋し
き御かけをもえ見たてまつらすかはらのおとゝ（融公）の御れい
をまねひてわらはすいしんを給はりけるい
とをかしけにさうそきみつらゆひてむらさきすそ
このもとゆひなまめかしうたけすかたとゝの
ひうつくしけにて十人さまことにいまめかしう
みゆ大殿はら（腹）（葵ノ上）のわか君（夕霧）かきりなくかしつきたて
てむまそひわらはのほとみなつくりあはせてやう
かへてさうそきわけたり雲ゐはるかにめてたく
見ゆるにつけてもわか君（明石ノヒメ君ニ）のかすならぬさまにて
ものし給ふをいみしと思ふいよ〳〵御やしろのかたを
をかみきこゆ国のかみまいりて御まうけれいの
大臣なとのまいり給ふよりはことに世に（世にイ）なく仕う
まつりけんかし（明石上ノ事）いとはしたなけれはたちましりか
すならぬ身のいさゝかのことせんに神も見いれ（心通用 [illegible]）
かすまへ給ふへきにもあらすかへらんにも中空
なりけふはなにはに舟さしとめてはらへをたに
せんとてこきわたりぬ君（源）は夢にもしり給はす夜
ひとよいろ〳〵（住吉三）のことをせさせ給ふまことに神のよろ

（良清ハ播磨守まうけスル也）

こび給ふべきことをしつくしてこしかたの御願にも
うちそへありがたきまであそびのゝしりあか
し惟光やうの人は心のうちに神の御とくを
あはれにめでたしと思ふあからさまにたちいで給
へるにさぶらひてきこえいでたり
（コレミツ）すみよしのまつこそものは（目出度ヲ感ノ心也）かなしけれ神代
のことをかけて思へばげにとおぼしいでゝ
あらかりしなみのまよひに住吉のかみをば
かけてわすれやはするしるしありなとの給ふもいとめで
たしかのあかしの舟このひゞきにおされて
すぎぬることもきこゆればしらざりけることゝあはれに

おぼす（入道ガ会家ノ心）神の御しるべをおもひいづるもおろ
かならねばいさゝかなるせうそこをだにして心な
ぐさめばやなかなかに思ふらんかしとおぼすみや
しろたち給ひて所〻にせうえうをつくし給ふなにはの
御はらへなゝせ（七瀬ノ祓今ノ世ニモ毎月アル也）によそほしうつかうまつるほりえの
わたりを御らんじていまはたおなじなにはなると（侘ヌレハ今ハタ同）
御心にもあらでうちずんじ給へるを御車の
もとちかきこれみつうけ給はりやしけんさるめしも
やとれいのならひにふところにまうけたる
つかみじかき筆など御車とゞむる所にて
たてまつれり

源
身をつくしこふるしるしにこゝまでもめぐりあひけるえにはふかしな（[illegible]也）

とてたまへれば、かしこの心しれるしもびとしてやりけり。こまなめてうちすぎ給ふにも、心のみうごくに、つゆばかりなれどいとあはれにかたじけなく（源ノ御心志ヲ思ヤ）おぼえてうちなきぬ。

明石
かずならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ

たみのゝしまにみそぎつかうまつる（明石上ハ猶舟ニナル也）御はらへの物（ハラヘ物ハ木綿ニヤ）につけてたてまつる。日くれがたになりゆく。ゆふしほみちきて入江（難波字堀江ハ大江田蓑の[illegible]）のたづもこゑおしまぬほどのあはれなるをりからなればにや、人めもつゝまずあひ見まほしくさへ（源ノ）おぼさる。

源
露けさのむかしににたるたびごろもたみのゝしまの名にはかくれず（次右ハ名石ナト付ニヤ）

道のまゝに（難波ニヨセタリ）（道ノツイデ也）かひあるせうえうあそびのゝしり給へど、御心にはなほ（明石ニ）かゝりておぼしやる。あそび（遊女）どものつどひまゐれる、上達部ときこゆれど、わかやかにことこのましげなるは、みな目とゞめ給ふべかめり。されど（源ノ心）いでやをかしきことも物のあはれも人からこそあべけれ。なのめなる（大方ノ事也）ことをだにすこしあはきかたによりぬる（アワクミチ方ヘハムトメザルコソヨロシケレトニヤ）は、心とゞむるたよりもなき物をとおぼすに、をのが心（遊女モノ心ノ外ナルヘシ）をやりてよしめきあへるもうとましうおぼしけり。

かの人は（明石）すぐしきこえて、またの日ぞよろしかりければ

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

まいらせてくらゐにそへたる願ともなとかつ〳〵はたしける
又なか〳〵しけるまさりて物思ひそひて
あかくれ口おしき身を思ひなげくいまや京におはし
つくらんと思ふ日かずもへずつかひあり
このごろのほどにむかへんことをぞのたまへる
いとたのもしげにかずまへの給ふめれど
いさやまたしまこぎはなれなかぞらに心ぼそきことやあらんと
思ひわづらふ入道もさていだしはなたんもいと
うしろめたうさりとてかくうづもれすぐさんを
思はんもなか〳〵こしかたのとしごろよりも
心づくしなりよろづにつゝましう思ひたちがたきことを
きこゆまことやかの斎宮もかはり給ひにしかは宮
す所のぼり給て後かはらぬさまに何事もと
ぶらひきこえ給事ハありがたきまでなさけをつく
し給へどむかしだにつれなかりし御心ばへのなか〳〵
ならんなごりハ見じと思ひはなちきこえ給へれば
わたり給ひなどする事ハことになしあながちに
うごかしきこえ給ても我心ながらしりがたく
とかくかゝづらはむ御ありきなども所せうおぼしなりにたれば
しゐたるさまにもおはせず斎宮をぞいかにね
びなり給ぬらんとゆかしう思ひきこえ給ふなをかの六
条のふる宮をいとようつくろひたりけれ

もみやびかにてよし[illegible]りよしはべる人ろこし（アタラシクキナル心也）
かうくそしよまぬ女房なしれおほく[illegible]さう人の（風流ヲ凡人好之ニアツマル心サテ其ウチニ此紀）
ほどびろまで物さびしう見やうなれどもやまろさ
さりまく色ありどもに儀にとりくまつらひて物の
いやしからずおぼそくおぼされけれまじくこのみちにおいて
ことしくへけるもゝうしうおぼしして居るなりける
係 おもうしうくうきくしてすゞろなるやあしねどかば（カケテシカカントハ思ケル子也）
さうらく物ともやさしあしせ人を里やしけると（該合ナト）
うくおぼしなりてはけるの日押しうおぼし給へは
おどろき（係六ヘワタリ也）（宛ト日コトハ也）わかつまぬ人方ありしたなる院とて
ひやうし給ふを兼に枕をさまおきてよくひてけり

（入道ノカタリ也）
くふちうつゝのさもいもなきにさてこし給ふもゐくさうよなし
里の人あるをひなれは兵（源詞）部のあるよりあるの君ばかりにみ
ものしきてやとゞろ押しうそのゝこうあい給ふく
ますておぼしとくめ悪けるを女もよのはまおぼ（入息）
して（大納言遺言）宮仕への院とも紙がやし給ひおそくてとゞまりて（御息ノ）
給らんとりなけりびこゝふかれくうずまへやかし給
色又又色ぐまんへもなくたぐひなき御ありさまなり
すんうひなびたるかたあらも（ミヤス）いとゞまさかし世の中と思ひ
はべけるやふてとさ家のうさ物とおぼしある（六ノ令ノウチニハトシ）
まぞみなまんとこゝ思ふ給へつまにぞとこさし入
ほくかい（ミヤス）紅やうほどこ（係詞 不能信並トモヤ）けくてなふ思ひさぶらふ

もゆをづかうまつりしうへをおしくしのれをよびんは
しぐひてはぢすふこゝろうしろやすからんとすれ
思ふのみろさうふうしろめたくなむおもひきこえし給にそ
なにしやすし給ふべきにも（ミヤス所）てくきこしたこしまうらん。（タノモシケニ此侍ヨリモ此世ノハサモナキナラヒナル物シトヤ）
おむべき人おやなどもまてみゆげる人だに女おやは
ますれぬるをいやし言ひけることはこう給へめまし
てなほし人めかさんは侍ふてもあぢきなけれかく（彼ノ好色ニシテハ世上ナトニ侍ルアラシホトニ）（秋ノ文 イカヽトシ）
やうちむにつゝ人すりしくとをとられぬをむかうて
わかきこむやうどしなれどのみてさ前うつすづい
よろすらにおぼしようふう気か侍をゆうつもと女（カシツミテ心セシメシタルトニヤ）
また思ひのほかなくその思ひをそふるに物はなん侍へ

かれへりのでさるかたにそのそをなれてみなさんと
思給ふるなどさまざま給へどあいなくもの給ふよう（後向）（アヂキナクモ）
なとおぼしをと年ばかりの川思給へしらるゝ
物をむかしのすれおほろへ名おほかりしかばの給に
なとももひなくすれよしなのつゝとてとなくる（ツ井ニコヽロサシ見エシトシ）
うすりうらをおほしとめのわづかなの物よりと
さりてみ御おもとすしもやとおぼしてやとう侍れ
丁のほころびよりみ給へつゝむりしなきかものの
うちまに侍らしいとおもしきに花やかなるそこさてまり
ぬの人々こまかかる文ざえん夜南してはまじう気なり（秋ノ文ナルヘシ）
丁のひんがしおもてひやの人ぶぞ家な

られし御几帳のきはなくひきさよせしまゐたちらよ
つゝ御めとくみてみとりし給へまゐつれ（歌ノ）給ひし給ふ
てうとものかしとおほいとれさ夜なかなりつう
なれといやさつくしき（歌ノ）なけれとみ西浦くしのか
ろまゐる頼りしら侍ふ事もひめくに（ホメタル心ナル也）いふつる物
つゝひちゝうふめいらに（いとそやりハイ）侍ふ給色々きちひちるく
みし給へてむとゝなくゆうし侍ふことさうしりうをの
ぬるものをとしおほしりくすい（ミマス門　ハヤ帰り給ト也）やくるしさまちまうし給
つくしあひれとゝやゝくらを給ひぬとく人ゝよう侍ふ
みをられ給ふ（保内）ちうくさりまりゝちなるしはよろしう
おほ御きまゐりてくるへきを心ゝろしさるしきとのの

かいりふおほされくそとそのうきのよしきこゝろ
まゐりもの（ミマス門）をそろしきふ給やみそくつましちのつゝう
くりをまなるおもてもわくらをのへうしこえふ
あさうしすゝすん（ミマス門作リノ）心給ふろと（歌ノ）紙をこしもきさこえ
さをつれをさうとゝもたのかしくうんなをやうし
さうしぬうろ（保内）侶ゆい御んのつゝまおほしけるもい
と気まなん（キリツボ）あ給へゑさらあまくめのし給へ
とちてしまもつひおほすと相さくなれと（キリツボ）う色へ
おほしみをそのうらまうすまへ中し給しつゝ
さこうをたのこやまし給し御すうし花としうし大臣
になりぬるよるひなくあけゆく（源ノ内子アマタオキトニヤ）にんもかけまゐ

さうぐしきなどはしやすくつかまつり（源ノ）君のみ法事とふらひ
わすれはさうしふらまもらつかへきぐくやうし給ふ七八日まで
てうちぬるなりあへなりおぼさるくまさといふも
ものなくて物むつかしくおぼされくうちへもまゐ
る給ふびやうぶの御まへなしをみてさうを給まへ
たりもしかく人もこしみおもしせざりけり御乳母
家の家けうさなとつゝうさうなれとうそまつ
りし事どもさうぐしけりく御こゝろ（源ノ甥カ）まさり給ふ（家にはせうそこきこえたり）
申しもおぼしく給らくすんと女別当（べつたう）して申しめする
やまとの御をとこしあやくも御しと合をしるやく
なれさ給ふおぼしめすどもうまてしくすんとやましのそし

人とのし出くるべき事どもおぼしをきて給ふやまとのかみの
りしきかとしころの御むすめ人とまうへしつかう（前にもたのみしとて此程も来ナドゝ）
みかどいとのしう殿（源ノ）の人くつすとをなくはらのう
さつうをめさあくれまうらなけのあはく御さう（精進）
まくみをおもうしこめておこりましせ給ふことつの
まとふひやのし給やうく（落ノ）御むしんづまり給くともみ
づゝ御かうへをなげしやみし給ひけまつりうおぼし
たまへをはじめしめて（落之母ヨリ遺言ニ此事ヲ止メヲキナト云ン）なけしらのもなしとうくのし
まゆるならなり富みなまいりみてまめ給く日ハ
いのふ家のありさまのすまみなけのぬりんと思
ひやつまつしのそ給ふ（落ヨリ夕ヘ）御をそまつれ給へつまぐ

係ノ文云

今の世といふにごらん〳〵

（係）かりみてまじひなれおしなまめ人のあさゝあ

ならし宿ぞのりしきゝし色のいろのくせかりし

きふのは絵へまかのきん人のほめふとくまつるか

もむしてほくろひ絵へういやめもあやなりうあさい

やすしにくし絶色ともきりれ人ほくうまやいや

ゆんなれおやくせめきこゆまでうひいろのあと

いやそうりうきんなりはことほえなとすこし

まして

（訣）さこゝものゝくみかくそうおしえのえくしあかる

うまでことおもほえぬなしほくましあなりつえ

ぶ海いやおしやうのてほてるゝれくなうかねと

らうけはまおくらのなりすらのよつ伊勢くてたし

絵らりる紙めかすおおしうりをいまうえしらう

けくとうもうくもむしうきめへきうしやおわを

まそれ日のひきさんしいやとしまことあをも知

のいとうしろめたけふむときめしとこしえつるか

連ど華の人もさやうなるよりめへ気ことなる

そひ気るの色むきよくそあつりひやうむ色の

いふそうし物おほしたるよちひはなけらせ絵をも

しらぬことせむ挫あはでさうくしえるうつまる

ようとむほしなりういふぶあやのふわんじりまや

し給くるへこそありゝまそりなとしぬめりしを
なくとも宮のはかまよれおほしかすへくまとほ
うしめてなさけをわらくすんおいするむちすべ
ふなときこえし給へとまりなくそのちらをし給ふ
おくまゝる人ゝ夜のそてのうましてしなたと
きこせなんをいやまなくめつゝのなりあやしくれ
かしられぞ人てもやしまつらひてこゝろ給むさ夜
とうれくやしもめく女君そう内侍なといふ人を
あれハこれまことにむしとりなとまそもを（王氏ヲイヘリ）
をあふ人てさふらふへしこの人しもこれ思ふ給へく
へまじらひをせさせまほしきまゝ人はそこそ給へ

うめりいのゝくさやうなる御かたちとみそしかなと
おほそとらゝくへき御おやむよそめゝすやき
まんより給むもさくめかゝくれへりく思ふとのふ
こともんよりくらし給へひ給まさこふとの御まし（ミヤスドコロノ）
ともやまやれてせきを給へむしなりてみ給ふと
其人もびわこひあへまつるくをくる月日はるゝ
ていらさしくひけそこゝのまさ給ふさふ
らふ人ゝもやうくおされけなとしてまつゝく（数別リ）
の京極わたりなれは人けとをく山てらのいりあひの
こゑしまつ虫も絶なしのちりまくそすゝのふ（ミマスチト）
おもしろき給おやときこゆる中まもゝにゝの音も

ちもはなれたてまつり給はてならはしきこえ給て斎
宮にもおやそひてくたり給事はれいなき事なるを
あなかちにさそひきこえ給し御心に
かきりあるみちにてはたくひきこえ給はすなりにしを
ひるよなう思しなけきたり
さふらふ人々たかきもいやしきも
あまたあれとおとゝの御めのとたちたに
心にまかせたる事ひき出つかうまつるな
なとおやかりて申給へはいとはつかしき御
さまにひんなき事きこしめしつけられしとい
ひ思ひつゝはかなき事のなさけもさらにつく
らす院はかのくたり給し大極殿のいつかしかりし
きしきにゆゝしきまて見え給し御かたちを
わすれかたう思しおきけれは参り給て斎院なと
御はらからの宮ゝおはしますたくひにてさふら
ひ給へと御息所にもきこえ給きされとやむこと
なき人々さふらひ給にかすかすなる御うしろみも
なくてやと思しつゝみうへはいとあつしう
おはしますもおそろしう又物思ひやくはへ給
はんとはゝかりすくし給しを今はましてたれかは
つかうまつらんと人々思ひたるをねんころに
院には思しのたまはせけりおとゝきゝ給て

けしきあらんをそむきてよこどり給はんをかた
じけなき事とおぼすに人の御ありさまのいと
らうたげに見はなたんはまたくち
おしうて入道の宮にぞきこえ給けるかう／＼の事を
なん思う給へわづらふに母宮す所いとおも
ゝしく心ぶかきさまにものし侍しをあぢきな
きすきわざにまかせてさるまじき名をもなが
しうき物に思ひをかれ侍にしをなん世にいとおし
く思給ふるこの世にてそのうらみの心とけずすぎ侍れ
侍にしをいまはとなりてのきはにこのさい宮の御ことを
なんものせられしかばさもきゝをき心にも
このこすまじうこそはさすがにみをき給けめと
思給ふるにしのびがたうおほかたの世につけ
てだに心くるしき事もみすぐされぬわざに
侍るをいかでなきかげにてもかのうらみわする
ばかりと思う給ふるをうちにもさこそおとなびさせ
給へどいときなき御よはひにおはしますをすこし
ものゝ心しる人はさぶらはれてもよくやと思ひ
給ふるを御さだめになどきこえ給へば
いとよう思しよりけるを院にもおぼさんことはげにか
たじけなういとおしかるべけれどかの御ゆいごん
をかこちてしらずがほにまゐらせたてまつり給へかし今

冷ニイイラセン事イカント源思ヘ合セ也
秋
源ヨリ藤ヘ語給也
源詞
ミヤスノ源ヲウラミ玉フ事
ミヤスノ末期
源ノ心ニあらんと御息の思合セ也
源ノ詞
只世の人ニ付テモ
冷
ミヤスノ恨ミ忘レテ源ヘ…
朱
入道宮ニ合セ也
藤宮詞
カコツケテ

もろくさこやめこしわさかなとも思しとくめと殿を
こまひ（朱ノ）のちまなりゆきそうやまし給をおもふしと
思ゆしとおほしと思のふかさしさ給ひしのふく
うすまんさうを結ちくまよおもしをつまのこと（言）給ふ
あるはすし給ひんと（源説）さ徳のうさきまふ心給ふくのこ
まいらせ給はむと（めさト同）おもひさたのつまのひのさち色もま（かくイ）
わひゆまよ人（源ノ右の人リテ名のんトスクリ玉ア）やりのまことそもくつくと結まきなくと
やのしのそ後まへけまちしめ殿ころくあくるまく
たまらてさんやおほ（源ノ）を女君（源同）まとしつかけん（源ノ里に女人トニ）思ひけく
らひさこしてきくひなりんまいやうえおもはする
あらひなくんと申しきつせ給はん（宮ノ）まてきまてことし

まおぼして源（入内ノ）りより入ゐと紙いみさ給へ大君の
宮まゐて女房への宮のひめ君をかつらとかくつまさ
まゐ給ひつるをわとく（源ノ兵部卿宮ト中アミキ）のひめあるは中まくりて
めてまし給ひんとんかうしくおはし（入右大臣ノ）を権中納言の
源氏をめをあ大殿の女房ときさあ色おはい殿れ給
こゝくいやまよそきとしうめくし給はのふう色も（冷）
よき入侍あうひかくさふ（あそひあそトン）おもいまし宮（宰相）の中のきも
おもしかゆてまおもひまいうてくいかようひの
ひとすへ（ちイ）手紙ほとすし文給うつゝことゝいと（入右大ノ常）しの
我つき入おゆく思ほし入給くそさ給ひまさと
結ほし（源ノ）おとくのよき給はむ思しりくらぬことしなく

卅一枚

九ノ　私情濁足れ

国立国会図書館

（於）おちやあかゞやの法うしろこそさしつるといにしへ時

くれはほさくこそうなる法むじんのいさ菽り（入石ノ衣病ら）

みそのふをたのもしき物まちかしのそいしあれ（入石玉ヶ下）

しまのことはしませばいつまでも（全ノ入石ノ衣主法ソ）かくして法てもむや

もくゆふひ給ふことかく紙すとまとすび（秋玉入内ラ死）

すぞひさふうちん法うしろみいつまらびあるべ

天こと成らり

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用